



あの日、未来は明るかった一。  
 慌ただしくもほっこりと、  
 現代人の郷愁を誘う  
 “昭和30年代のマスカルチャー”

### 駄菓子屋とお菓子屋のあったころ Good old candy stores

本書の打ち合わせの最中、編集者のNさんとのあいだで「駄菓子屋」と「お菓子屋」の区別が話題になった。僕たちの年代では何となく住み分けができていたが、今では共に絶滅危惧種。駄菓子屋に行った経験の無い子ども（もう大人になっている人も）も多いし、お菓子屋はスイーツを売る店を指すこともあるので、定義をはっきりさせておく必要があるだろう。

僕流の区別では、駄菓子屋は客のほとんどが子ども。商品も子どもが小遣いで買える、聞いたこともないマイナーな会社の物ばかりで、中にはかなり怪しいものもある。店主は大抵おばあさん、あるいはおばさんで間口が狭く、店は路地裏にあって屋号の無い場合が多い。映画『20世紀少年』に出てくる店をご想像いただければよい。

一方のお菓子屋は、せんべいやポテトチップなどのスナック類、キャラメル、ガム、チョコレート、ドロップ、アイスクリームなどを売る店。明治や森永などのメジャーな会社の商品が中心で、パン、牛乳、ジュースなどを売っている店もあった。自家製の和菓子やせんべいなどを販売する菓子店とは異なる。客の割合は子どもと大人が半々ぐらいというところか。店は商店街や表通りにあり、屋号のあるのが普通だった。駄菓子も扱っていてどちらとも区別のつけ難い店もあったが、誰もが両者の違いを認識していた。

### 駄菓子屋という文化

昭和の終わりくらいまではどの町にも駄菓子屋があり、子どもたちの社交場となっていた。子どもにとっては一種の通過儀礼であり、学校とはまた違う社会とのかかわり方を学んだものだった。ささいなことから“客”同士でケンカになったりしたが、

店主に一喝されると悪ガキでもピタリと止めた。店主は王様だ。出入り禁止にでもなったら死活問題だ。それに、常連たちから総スカンを食っても困る。万引きもあつたらしいが、客の身元は大体把握されていたので少なかったようだ。露見した場合でも穏便に済ませ、もちろん「金を払えばいいだろう！」と居直るようなバカな親もいなかった。

僕の町にも数件の駄菓子屋があり、2軒はおばあさん、1軒はおばさん、もう1軒は初老のおじさんが店主だった。おじさんの店ではパンや牛乳、缶詰も売っていたが、ホコリをかぶった缶詰は終戦直後の物にも思え、実態としては駄菓子屋だった。近所の友人の弟が「エイジさん」と呼んでいたのですとそれが屋号だと思ってたら、たまに対応するいつも学生ズボンをはいてる高校生くらいのお兄さんの名前だったらしい。ペンキの剥げかかった看板には「商店」の文字がかろうじて読み取れた。

エイジさんは普通だったが、おじさんと奥さんらしいおばさんは実に感じ悪かった。特におばさんは、つり銭を催促する子の手をひっぱたいたり、店先の黒猫をなでようとすると「触るんじゃない！」と怒鳴ることも珍しくなかった。一方通行の通り沿いであって、小さい子にもうるさいこと言わずに火薬類を売ってくれたから客は絶えなかったものの、こんな調子だから買い物だけするとみんな早々に退散した。

そこから歩いて2、3分のおばあさんの店では、おでんも売っていた。下町の駄菓子屋ではお好み焼きやもんじゃ焼きも売っていたようだが、僕の住んでいる地域で調理した物を出すのはここだけだった。ただ、ちょっと甘めなのが難点で、1商店のそばの公園に毎日来る屋台の「あいちゃんおでん」



の方が流行っていた。しかし、突然あいちゃんが来なくなってからは、僕もみんなもこのおでんを食べるようになった。

もう2軒は商店街のスーパー裏手に20メートルほど離れてあった。おばさん店主の方はちょっと色っぽく、客の大半は男の子だったから心なしかこちらの方がにぎわっていて、双方で相手の店の悪口が時々出た。

商品の種類や並べ方に多少の差異はあっても、どの店も同じようなものだった。定番のベビースターラーメン、ふ菓子、薄いせんべいに乗せた梅ジャム（僕はこれが嫌いだった）、口の中がいっぱいになる丸いアメ玉。小さなガラスの試験管に入ったゼリー(?)は、ガラスが割れて口を切る者が続出した。他のどれも、人工着色の色も鮮やかで、子どもが欲しくなるような物ばかりだった。小さなせんべいは1円からあり、30円くらいあれば十分楽しめた。男の子には銀玉鉄砲(30円と50円の2サイズがあっ





た)、パチンコ、かんしゃく玉、2Bなどの火薬類が人気商品だった。だが、女性店主の店の中には火薬類を置かないところもあり、まとめ買いしようとする「何に使うの?」といづかられ、少量しか売ってくれないこともあった。薄利なのに「売らんかな」ではない良心的商法と言えたが、衛生面から駄菓子屋に「出入り禁止令」を出している家庭も少なくなかった。でも、行くなと言われると余計に行きたくなるのが人情で、親の目を盗んで行くのが当たり前だった。子どもにだって、付き合いというものがあるのだ。

\*

そんな駄菓子屋も小学校、遅くとも中学校入学と同時に卒業した。それ以上になると客の子どもたちに奇異な目で見られるから、「留年」には覚悟がいる。大人になってから一度だけ花火を買いに行った時も、子どもたちから「何だお前?」という目で見られたが、せっかくなので店内を観察してみた。相変わらずの品々の中にも流行のキャラクターを取り入れた物があり、時が止まったような空間も、社会の変化と無縁ではいられないと感じた。おでんもやっていたおばあさんの店はとうに無く、1商店も火事に遭ってからは自動販売機だけになって、残りの2店も間もなく閉店した。そのころには、「駄菓子屋卒業生」の発案なのか、ベビースターラーメンやふ菓子がメジャーに躍り出て、スーパーなどでも売られるようになった反面、駄菓子屋の激減がマスコミでよく取り上げられていた。老舗(しにせ)にまじって、駄菓子屋文化を守るべく若い人が新規に出店するケースもあり、僕も見掛ければ寄るようにしていた。同好の士と思われる大人もちらほらいて珍客扱いはされなくなったが、時代の波には抗し切れず、バブルとその崩壊が追い打ちを掛けた。現在も営業を続けている店には、本当に頭が下がる。もしお近くに駄菓子屋があるなら、

それは大変な幸運だ。残念ながらうちの近辺は全滅し、2、3年前には「駄菓子パー」なる駄菓子も売っている飲み屋が開店した。

近年、各方面でもてはやされるレトロ感覚が売りなのは明らかだが、やはり本物の駄菓子屋とは異なる。一度行こうと思っ

ているうちに、いつの間にか無くなっていった。奇しくもその直後、あの色っぽいおばさんの店のそばで、本人を見掛けた。娘さんらしい女性の押す車椅子に乗せられ、眼も虚ろで別人のようだったが、あの人間に間違いなかった。感傷も手伝った複雑な思いで後姿を見送りながら、心の中で「長いあいだありがとう」とつぶやいた。

### お菓子屋は流行の発信地

昭和38年(1963)。国産アニメ第1号の『鉄腕アトム』の放送が始まった。後に『アストロボーイ』の名でアメリカでも放送され、アニメ、マンガを日本の顔にまで高めた最初の一歩である。この「アトム」人気を盛上げたのが、アトムシールだった。スポンサーの明治製菓に、発売間もない「マーブルチョコレート」のふたの一部を送ると(30円の普通サイズは2枚、50円の大サイズは1枚)もれなくもらえ、日本中の子どもが勉強机やランドセルに貼っていた。ところが、思わぬ事態が持ち上がる。シール欲しさにマーブルチョコレートを買いきり、中身を捨てるという事例が相次いだのだ。「捨てられた多量のマーブルがあった」という噂(うわさ)も何度か聞いた。鼻血が出るとか興奮するとかで、チョコレートの食べ過ぎは戒められてもいたし、そんなにたくさん買っても食べられるものでもない。持て余すほどのチョコレートや過分な小遣いを与えた家庭教育の問題であるにもかかわらず、非難は食べ物を粗末にする僕たち「現代っ子」へ向けられた。

明治製菓への苦情も少なくなかったらしい。グリコのおまけ付きキャラメルは戦前からあり、『巨人と玩具』(1958)という邦画ではキャラメルの販売を伸ばすための熾烈なおまけ開発合戦も描かれていたから、メーカーは伝統的な商法にのっとただけに過ぎない。それに、いくら売れても肝心の商品が捨てられたのでは、生産者としては忍びなくもあつたらう。

シール問題は食糧難の時代に育った大人

たちには想定外の展開だったに違いない。しかし、子どものスポンサーである親たちにすれば、許し難い出来事だった。商品がチョコレートというのもまずかった。終戦直後、進駐軍が上から目線でばら撒いたチョコレートに対する親世代の複雑な感情も、また拍車を掛けたと考えられた。騒ぎは次第に収まっていったが、その震源地は町のお菓子屋だった。直後には、お湯を注ぐだけの「森永マンガココア」に入った、アニメ『狼少年ケン』のシールがブームを呼んだ。お菓子屋は流行の発信地でもあったのだ。10円アイスも、キャラメルもガムもドロップも、みんなお菓子屋で買った。

\*

後に役割を代わったコンビニエンス・ストアやスーパーと最も違うのは、お菓子を量り売りしていたことだろう。どこのお菓子屋にも、ガラスのふたの木製ケースが店の中央に鎮座し、さまざまな種類のせんべいやゼリーなどが区分けされて、客を待っていた。買いに行く時、シャベルのような銀のすくいケースからお菓子を拾い上げ、白い薄紙の袋に入れて両端を持って2、3回転させて渡してくれた。お菓子屋といえ

ばこのイメージだ。手持ちの小遣いや食べたい量だけ売ってくれるのがありがたかった。今でも好きな揚げ小丸、歌舞伎揚げ、えび満月、バナナ型のピンク色の干菓子ドライバナナをよく買ってきては食べた。ドライバナナは父親が子どもの時分からあったというから、超ロングセラーだ。ただ、適したビニール袋がまだあまり出回っていなかったため、保存する場合は空き缶に入れる必要があり、どこか家庭にも専用の缶があった。また、頻りにケースを開閉するために湿気りやすく、買った時から湿気っぽいことも珍しくなかった。油を使った僕の好物類は、これに酸化も加わるのだから困ったことだった。

さすがにポテトチップスやポップコーン



は袋入りで売られていて、いわゆるスナック菓子は当時これぐらいしかなかった。これらの定番商品もメーカーによって微妙に味が違い、特定の店でしか買えない商品も必ずといっていいほどあり、それが店の個性だった。植物性のクリームを挟んだカステラサンドは遠くの店にしかなく、商店街の「A 堂」はおばさんが店主だったせいか、せんべいより甘いお菓子のが多く、駅前の店ではコーヒー豆も売っていた。僕がよく買いにいった近所の「みのる屋」では、果物も少し売っていて、季節のカットフルーツや、時折スポットで出物があつた。10円の綿あめは、その最たるものだった。お祭りでは50、60円はしたから、小さいとはいえ10円はありがたい！ 子どもたちが殺到し、おじさんがセーターを綿で真っ白にしながらかつて大奮闘していた。`みのる、はおじさんの名前らしく、その点は駄菓子屋の「J」と同様だが、みのるさんの方はいつも感じが良かった。通りすがりの知り合いらしいおばさんが「大変ですね」と声を掛けると、「いやあ、10円じゃ合いませんよ」と苦笑していた。どうやらそれは本音だったようで、10円綿菓子はあつという間に消え、機械も無くなってしまった。

みのる屋が他の店と一番違ったのは、夜10時過ぎまで営業していた点だった。このころは、ラーメン店や飲み屋を除けば、普通の店は午後8時、遅くとも9時には閉店し、周辺は真夜中の趣きだった。中学生のころは、夏休み中などに近所のHと時々みのる屋に寄つた。ロツテのフルーツやクールミントのガムは定価の20円なのに、グリーンガムだけ15円で売られていて、一時期よく買った。僕はそれを、Hは30円のチョコレートを買つて店を出た。するとHの様子はどうもおかしい。「どうしたんだ?」「50円出したのに70円お釣りがきたぜ。これで2度目だ。あのおばさん抜けてるな」おばさんというよりお姉さんに近い歳だ。目がよく見えないわけでもなからう。100円玉より大きく、穴が開いて手触りも違う50円玉を100円玉と度々間違ふのは理解に苦しむ。混雑時ならいざ知らず、夜は客もまばらだ。つっけんどんな駄菓子屋の「J」ならともかく、いつも優しく感じのいい人だから気が引ける。「お前、返してこいよ」と言うと、渋っていたHは従い、戻ってくるなり言った。

「これじゃ、遅くまで商売をやらなきゃならないはずだな」「遅くまでやったって、釣り銭を間違えてばかりいたら損するだけじゃないか」

こんな会話を交わしたが、笑い事ではなかった。スーパーが台頭するにつれて量り売りを止める店が相次ぎ、店の中心を占めていた棚は撤去されて、代わりに袋入りの商品が並ぶようになっていた。水に漬かつて売られていたコンニャクやしらすなどがパック入りになったのも、同じような時期だったと思う。一つには衛生面の問題と、お菓子屋の場合は小口の客にいちいち対応する手間が敬遠されるようになったのだろう。

湿度の問題はこれで改善された反面、お菓子屋の存在意義自体が問われることにもなった。大抵が定価か、わずかの値引きでの販売だったから、同じ商品を大量に仕入れてより安く売るスーパーにはとても太刀打ちできない。次第に閉店に追い込まれ、お菓子屋に行った経験の無い世代では、もはやイメージすらつかみにくいうだ。

駄菓子屋を存続させようとする機運は激減によってむしろ高まったが、お菓子屋についてはそうした話は聞かず、気が付けば無くなっていった。頑張っていたみのる屋も10数年前に閉店し、その後マンションになった。店が賃貸だったとは初耳で、店主は郊外で隠居するとの由。働き者だったから、結構蓄えがあつたのだろう。商店街のA堂は、息子さんが区議会議員に当選し(!)今は連絡事務所になっている。いずれもお菓子屋にふさわしい感じの幸福な幕引きなのが、僕にはうれしい。

### 粉末ジュース盛衰記

Powder juice

戦前から戦後に掛けて一世を風靡した、エノケンこと榎本健一という浅草オペラ出身の喜劇俳優がいた。小柄な体で飛び回り、江戸っ子らしい口上が大気味よかった。昔の出演作をよくテレビでやっていたので、子どもでも知っていた。昭和37年(1962)には若いころのケガが元で片足を切断せざるを得なくなり、義足で復帰する不屈の姿が再び注目を集めていた。彼の唄う「渡辺のジュースの素です、もう1杯!」というCMがテレビから流れ始めたのはこの直後



で、声だけの出演なのはこうした事情による。だが、さすがに稀き代だいの名優だ。しゃがれ声でけつしてうまはしないものの、何とも心にしみる。たちまちこの時代を象徴する`コマソンの一つとなつて、「渡辺のジュース」も粉末ジュースの代名詞にまでなった。

渡辺姓でこのころ茶化されなかつた人はまずまい。僕のクラスにいた悪ガキの渡辺も、ただでさえ短気なのに「黙れ、ジュース!」などと言われてはゆでダコのように顔を紅潮させていた。それまでも粉末のジュース、ソーダ、ラムネなどは広く流通し、10円アイスと並んで大人にも人気があつた。駄菓子屋ではオブラードと同じ成分の小瓶に詰めたラムネや、錠剤に固めた物も売られ、粉をそのままなめる奴もいた。「そんなことしてうまいのか?」と聞けば、オレンジの極彩色に染まった舌をのぞかせておどけて見せた。グレープ味をはじめ、ピーチ、パイナップル、アップル味なども売られていたが、やはりジュースといえばオレンジ味が主流だった。本物のオレンジジュースは、オレンジに高額な関税がかかっていたうえに輸入制限もあつたため、主にホテルなどで供される`別物、とも言うべき最高級品。一般にオレンジジュースといえば、これら粉ジュースや、唯一果汁の入つた「バヤリース」をはじめとする瓶入りの飲料を指した。アメリカのドラマに出てくるジュースも、こうした物だと思ひ込んでいた大人も少なくなかつた。

ただ僕は、噴水型自販機の10円ジュースや瓶入りジュースは大好きだったが、粉の方は付き合いで飲む程度だった。液体のジュースと味の差があり過ぎて、氷でも入れなきゃ飲めた代物ではなかつた。当時は冷蔵庫の普及率がまだ低く、冷蔵庫があつても、そこから氷を取り出すのがまたひと苦勞だった。うちにあつた戦後間もなくに買ったという冷蔵庫は、僕が大学を出るまでよく働いてくれたが、本体の下の3分の

1 ぐらいがモーター部分になっていて、製氷室も独立しておらず、1 つしかないドアの裏側も物を入れられるようにはなっていない。しかも、レバーを押し上げる方式のがっちりした金属製の製氷皿は、大人でも氷を取り出すのに往生した。母親など水道で水を流しながら出刃包丁まで使って取り出していた。いきおい、こらえ性の無い子どもたちは氷なしの生ぬるいジュースを飲むことになって、それが僕をさらに粉ジュースから遠ざけた。

ところがある日、エノケンの名調子に乗せられて渡辺のジュースが無性に飲みたくなった。「もう一杯！」という CM のフレーズが頭の中を駆け巡り、買って来たジュースを立て続けに数杯飲み干したのは、魔が差したとしか言いようがない。家人が留守で僕一人だったのも災いした。間もなく猛烈な腹痛に襲われて、翌日学校を欠席する破目になり、祖母にこっぴどく怒られた。前の年にも学校のバザーで瓶ジュース 1 本とポップコーン 1 袋を平らげ、同様の事態を招いていたので、反省と自制心の無さも強く戒められた。

この一件で僕は再び粉ジュースを敬遠するようになったが、世間でも、合成 100% の物をジュースと冠することに批判が出始めていた。いわゆる「不良ジュース追放運動」(昭和 42 年[1967])である。確かにジュースばかりか、牛の絵が描いてあるだけの馬肉 100% のコンビーフや、パクリ商品が我が物顔で横行していたのは目に余った。そういう商品に限って「最近、当社の製品を真似た悪質な類似品が出回っているのでご注意ください」と印刷されていて、笑いを誘っ

た。どこぞの国と同じで盗人猛々しいとはこのことだが、そんなことは皆承知していたから、あまりに劣悪な商品は自然と淘とう汰たされていった。

渡辺をはじめ、多くの粉ジュースは商品名を変えてその後も生き残り、小学校高学年のころは、風呂上がりに粉末のメロンソーダをよく飲んでた。もともと合成のソーダは液体と粉の味の差が少なく、サイダーやコーラも炭酸が抜けるまで待っていた僕にとっては、粉末ソーダぐらいのピリピリ感のほうが都合がよかった。

しかし、僕が中学生だった昭和 44 年(1969)の秋、人工甘味料チクロに発がん性があると大騒ぎになり、日本中がパニックになった。ガムの原料の天然チクルまでやり玉に挙げる風刺マンガが新聞に載るなど、ヒステリックな過剰反応を巻き起こし、チクロは使用禁止となった。安価という最大の利点を失った粉末ジュース類は大打撃を受け、生産を打ち切るメーカーが相次いだ。渡辺製菓も急激に業績が悪化して他社に吸収され、やがて消滅してしまった。影響は他の食品にも及び、戦後を引きずってきた日本の食卓の転換期ともなった。

池田内閣下の「所得倍増計画」は高度経済成長の波に乗って目標前に達成され、人々は安さよりも質や安全を求めるようになっていた。ミカンを原料にした国産の「ポンジュース」が全国区に進出し(すごく酸っぱくて、ソフト、が追加発売された)、やがて本物のオレンジジュースが手頃な価格でスーパーでも入手できるようになると、粉末ジュースは記憶の彼方へ去っていった。

\*

ところが平成の初めごろ、思わぬ所で粉末ジュースと再会することになる。それは祖父が大学病院に入院した時だった。「さっき霊安室まで散歩に行ってきた」。祖父は見舞いに行った僕にうれしそうに言った。冗談などではない。祖父は準備がいいというか、この手のことに関心が強い。死亡広告を出す要領を尋ねに新聞社まで出掛け、「どなたのですか?」と問われて「俺だ」と答え、係員を驚かせたこともある。

帰途、僕も地下の霊安室を見に行くと、廊下には解剖に使われたらしい多数のメスが無雑作に置かれ、隣には職員用の食堂があった。店内は薄汚れてうらぶれ、そのころでもかなりレトロなたたずまいだった。

辺りにはお線香の匂いも漂っている。これでは大抵の人が二の足を踏むだろう。数人の看護師がタバコを吹かしながら談笑していて、医療従事者のタフな神経に改めて感心したが、そこで食事をしようと思ったこっちも人のことは言えない。

僕は数少ないメニューから、肉じゃがと小さなコップに入ったオレンジジュースを取って席に着いた。食べながらジュースを口に運んで、一瞬我が目、いや舌を疑った。人工甘味料の味こそしなかったが、粉れもなく粉末の味だった! まさか病院の地下の片隅で生き続け、線香の匂いにつられてゾンビのように甦よみがえってくるとは、話が出来過ぎている自宅に戻った祖父は数年後に亡くなり、その 8 年後には同じ病院で祖母が亡くなった。葬儀社を待つあいだ、僕は気をまぎらわせようと霊安室を出て深夜の病院の地下を一回りしながら、故人が元気だったころの思い出に耽ふけた。件くだんの食堂はもうなかったが、そこから一気に渡辺ジュースを飲み過ぎた時まで記憶がさかのぼり、人工甘味料独特の後味とほろ苦さが重なった。ミレニアムかまびすしい 2000 年盛夏のことであった。

著者：千蒙豹一郎  
作家・評論家。日本刑法学会、ベツト法学会会員。  
著書に『法律社会の歩き方』(丸善)『スクリーンを横切った猫たち』(ワイス出版)の他、『東京新聞』、『猫生活』(緑書房)『ミステリマガジン』(早川書房)をはじめ連載多数。独特な題材と切り口で、草創期からの海外ドラマの研究にも力を入れている。



昭和30年代の  
僕と日本の少年時代  
備忘録 for iPhone  
千蒙豹一郎

あの日、未来は明るかった——  
懐たたくもほつりと、現代人の理想を誘う  
“昭和30年代のマスカルチャー”

千蒙豹一郎の著書に  
高橋昌史の解説が  
はいりまわります。

クレーンやクレーン、アトモやアトモ、カラーテレビ、クレーン、ハンバーガーショップが  
あふれた昭和30年代の少年時代。その日、僕が知ったのは、昭和30年代の少年時代。高橋昌史の解説が  
はいりまわります。千蒙豹一郎の著書に、高橋昌史の解説がはいりまわります。

\*当書 DVD 版は、月刊 FDI 編集部にて\*  
本文：108 ページ / 映像：2分 23 秒  
2012年9月 ミリアムワード(株) 発行  
価格：1,980円(税込)  
株式会社ユニワールド  
東京都世田谷区松原 2-34-9  
TEL.03-5376-7233  
FAX.03-5376-7246  
info@uni-w.com

**不良ジュース追放運動**  
消費者団体の草分けである「主婦連」が行った運動。この結果「JAS 法(農林物資の規格化及び品質表示の適正化に関する法律)」が改正され、果汁 100% の商品のみが「ジュース」という名称で販売できることになった。

ちなみに 1 種類の果実の果汁 100% の商品は「果実ジュース」、2 種類以上の果実混合で果汁 100% なら「果実ミックスジュース」、果汁の割合が 10% 以上 100% 未満の商品は「果汁入り飲料」と分類される。